

第四章 浜松日体高等学校の沿革

(一) 開校の経緯

昭和三十八年は、戦後の第一次ベビーブームに生まれた子供たちが、高校進学を迎える年であった。同年三月、浜松市内二十四の中学校を卒業する生徒は八、二五二名にのぼり、前年度と比較すると約二、四六〇名もの増加となっていた。その内の、六六・九パーセントつまり五、五二二名の生徒が進学を希望しており、市内の県立高校五、私立高校六、市立高校一の計十二校（総募集定員二三、〇六〇名）では、到底これらすべての者を受け入れることは不可能な状況にあった。同年四月に県立浜松南高等学校が開校の運びになるにせよ、また公私立高等学校の学級増による増員分が見込まれるにせよ、いずれにしても高校進学は狭き門となり、約一、〇〇〇名以上の中学浪人を生む事態が予測された。

浜松市当局としても、その対応策にはかなり苦慮したようであるが、最終的には浜松市に私立高等学校を誘致することによって活路を見出そうとしたのである。当時の浜松市長平山博三氏は、『はともち』（創立二十周年記念誌）の中で、次のように語っている。

当時浜松というのは本当に学校が少なくて入学が難しかった。随分遠くまで、豊橋などへいくのはもう当然なのですが、島田などについて、しかも、それでもどうにもならないで、いわゆる高校へ入るための準備をす

る予備校へ行ったりしていたのです。何としても、これは私も市政を担当させていただいている立場では、何とかこれを救いたいという、そういう気持ちで県立の方はかなり来ていたのだ。県立の学校を誘致しましたが、実際には浜松市が当時かなりの金を出さないとやっていけないのです。来てくれないのです。一つの学校、高校を造るには市がかなりの財政負担をしないと出来ない、そういう時代であった。それで方々の私立の学校をかなり見て歩いた。

このように、各地の私立高校を視察する中で、平山市長は柏日体高等学校を訪れる機会を得た。同校の学生の礼儀正しさは市長に強い感銘を与えたという。『はともち』の中で、当時の印象を次のように語っている。

私が門のところから入って、だんだん校長室をたずねるつもりで行ったのですが、ちょうど学校が終わって帰る時期だったと思います。生徒の皆さんが門の方へ向かって歩いてくる。どの人を見ても、私の前に来ますと止まって帽子を取って頭を下げる。一人も下げない人はいないのです。帽子をわざわざ取って、立ち止って、そして礼をして、「これは学校を尋ねて来られた学校のお客さんだ」という気持ちで挨拶しているという態度を、「立派だなあ」と思いました。本当に、これはよくやれるなという、そういう感じがした。

この柏日体高等学校への訪問がきっかけとなり、平山市長は、是非ともこのような学校を浜松に一つ誘致してほしいとの要望を、当時の日本体育会理事長米本卯吉に持ち掛けたのである。その折、まず米本理事長は「浜松は遠いなあ」と述べられたそうであるが、平山氏が「実は柏の学校を見に行った。こういう姿だった。これは理事長さ

んの気持ちを校長先生が受け取っておらなければあ、いうことはできない筈だ、私は本当に感心しました。」という話を持ち出したところ、最後に理事長が「それではどんな所があるか一度見に行きましょう」ということになったという。

米本理事長も、当時静岡相互銀行の社長であった関係上、自分で育て上げた生徒を自分の会社や地元企業の送り込みたいとの希望を予てより持っていたようであり、静岡県東部地区に実際に学校誘致の計画を考えていた折でもあった。

このようにして、浜松日体高等学校設置の話が具体化し、開校へ向けての第一歩が踏み出されることになったのである。

まずは、昭和三十七年六月十二日、浜松市役所市長公室で日体大関係者と浜松市当局関係者の間で、私立高等学校設置の件についての会合が持たれた。日本体育会側からは米本理事長が、浜松市側からは市長をはじめ市議会議長や小中学校PTA連絡会長などの関係諸氏が出席し、それぞれの立場から意見交換が行われた。席上、米本理事長から「日本体育大学附属高等学校を浜松に設置する」との意志表明があり、併せて普通科課程の高等学校にすると同時に特色ある学校にしたい、との意向も申し添えられた。また、校地の候補地として、積志(半田)地区(四五、〇〇〇坪)、富塚地区(三〇、〇〇〇坪)、志都呂地区(三〇、〇〇〇坪)が考えられている旨、市側から発表された。これを受けて翌十三日には、改めて浜松市文教厚生委員会正副委員長が、日本体育会経営の柏日体高等学校と日体佐原高等学校を視察している。

続いて、日付は前後するが、昭和三十七年七月五日に、浜松市長、浜松市議会議長、浜松市教育委員会会長宛、浜

松私立小・中学校連絡会会長ほか二、九一八名より、私立高等学校の新設方についての陳情書が提出された。かくして同年七月二十三日には、浜松市議会全員協議会が三十四名の議員及びその他関係者の出席のもとに開催され、日本体育大学附属高等学校の誘致問題が諮られ、若干の意見交換が行われた後、満場一致をもって採択されている。それを受けて、同月二十六日、日本大附属高校誘致の問題について、浜松市当局関係者と日本体育会理事長、栗本日本体大学長、西村法人事務長が最終的な会合を持った結果、当初希望していた富塚地区の市有地約二五、〇〇〇坪は谷間の起伏がはげしく、埋め立てに手間取りそうであることから断念し、別に市内半田町にある県茶農業試験場横の市開発公社所有地を候補地と決定した。学校用地については、当初市側が無償で提供する事も考えていたようであったが、他の私立高校との兼ね合いもあり、同用地はすべて日本体育会が買取し、父母からの寄附金等を募ることなく、総工費一億六千万円をかけて校舎等の建設を急ピッチに進めることになったのである。

かくて、同年八月二十五日には、静岡県知事に対して正式に「浜松日本体高等学校設置認可申請」提出の運びとなつたのである（注・日本体大付属高校ではなく、姉妹校として位置づけられた）。そしてこの申請にあわせて、創立準備委員会が組織され、日本体育会企画部参与の一戸公哉氏と日本体育会事務長の西村清隆氏がその任にあたることになった。両氏は、建設現場の飯場の片隅にある仮事務所に長期にわたり滞在し、時には、東京―浜松間を中古のダットサンで往復することもあったという。開校の影に、両氏の涙ぐましい努力があつたことを忘れてはなるまい。校舎の建設施工は勝村建設株式会社が請負い、認可の見通しがついたことから、十月十日に地鎮祭が挙行された。第一期工事として、鉄筋コンクリート造り地下一階地上三階建て本館校舎及び倉庫、教職員宿舍二棟等計九一〇坪（二、九八三・八九㎡）の施設建設が予定され、翌春四月完工を目指して工事がすすめられた。この間、同年十一

月八日に、静岡県指令六四一号により、浜松日体高等学校設置が認可されている。

昭和三十八年一月二十一日より三十一日まで、飯場の仮事務所において第一期生の入学願書の受付が行われ、一、六一七名の願書が提出された。そして、二月十日から三日間、積志中学校を会場として入学試験が実施された。試験業務は、一戸企画部参与と西村事務長を中心に、柏日体高等学校及び日体荏原高等学校の教員・生徒の応援を得ておこなわれ、受験生一、六一七名中、一九一名（男子一二三名・女子六八名）の者が第一期生として入学を許可されたのである。

このように、浜松日体高等学校は、柏日体高等学校の教育方針に強く心を打たれた平山浜松市長の強い要請と米本理事長の熱意に支えられ、短期間の内に開校を迎えることになった。

(二) 草創期

昭和三十八年四月一日をもって、昨年来創立準備委員として全力を傾注してきた一戸企画部参与が初代校長に任命され、同時に、専任教員十二名、講師三名、事務員二名、用務員一名に辞令が発令された。校舎の第一期工事が四月五日に竣工すると、すぐに新入生が招集され、現在も実施されている入学前の準備教育が行われた。そして四月八日、一九一名の新入生を迎え、二〇一教室から図書室までの仕切りを取り除いた臨時の会場で、開校式及び入学式が挙行された。式は、米本理事長及び一戸校長の訓辞、さらに平山浜松市長、竹本衆議院議員等の祝辞があった後、新入生代表の宣誓がなされ、厳肅の中に記念すべき第一回入学式が終了した。なお同日、式の後に、米本理事長により前庭に建てた「積志台」の碑の除幕がなされ、また、記念の植樹が平山市長の手によって行われた。

浜松日体高等学校の教育指導理念は、次に掲げる三点に集約される。

- 一、健康と信用は人生最高の財宝である。
- 一、努力は天才に勝る。

一、両親あつての己であることを深く自覚し、その恩愛に報いその期待にこたえよ。

これは米本理事長の人生訓でもあるが、この指導理念に沿って、一戸校長は、昭和三十八年四月十七日次のような校訓を制定するとともに四つの生徒実践目標を提示している。

へ校訓へ

「積志力行」 「清節篤行」

へ生徒実践目標へ

- 一、清掃の徹底
- 一、時間厳守
- 一、週番生徒の積極的活動
- 一、礼儀と言葉遣い

このような実践目標を介して、柏日体高等学校の場合と同様に、徹底した「躰教育」がなされ、徳育面の強調された特色ある校風が築かれていった。それは、昭和三十八年四月一日に施行された学則第三条の目的の中にも、見出すことができよう。

浜松日体高等学校は、教育基本法の精神に則り、学校教育法に従い、中学校における教育の基礎の上に高等普通教育及び専門教育を施し、特に健康な身体と健全な人格を陶冶し、社会的教養と道徳的徳性を身につけさせることによって国家社会に有為な人材を養成することを目的とする。

最初の授業は四月十一日から始まった。この日から生徒は登校すると、柏日体高等学校の場合と同様に、校内服に着替えている。開校当初は、毎日のように教職員・生徒が一丸となり校庭の石拾いや学内の整備に汗を流した。その折りには校長自らが率先して整備作業にあたった。学級は、男女別学級で男子三クラス、女子二クラスの編成であったが、そのような作業を通して男女の別なく浜松日体高等学校の一員であるという自覚が生まれた。

いっぽう、短期間の内に開校へとこぎつけたため、特に学校周辺の環境整備は追いつかず、今日では考えられないような苦勞もしよいこむことになった。通学方法についてみてみよう。バスは朝夕各一本づつしかないために、乗り遅れると曳馬野又は積志から歩かねばならなかった。したがって乗り遅れて次のバス停まで追いかける光景は朝夕の見慣れた光景だった。このような不便から、学校側はバイクによる通学を許可するようになる。また、学校の付近に雑草が多く、女生徒はそこに潜むブヨなどにさされ手足を赤く腫らした。父兄から苦情を持ち込まれた。

さて開校当初の教育課程についてみてみよう。それは次頁の表に示した通りであるが、総履修単位数は、男女とも一〇二単位で、芸術科の音楽・美術・書道の教科以外は全て必修科目であった。

授業と並行して、開校当初より教科外活動や学校行事の開催にも力が注がれ、生徒たちは色々な体験を得る機会

普通科・教育課程

教科科	科目	単 位 数				指 導 時 間 数	摘 要	
		学 年 別			計			合 計
		1	2	3				
国 語	現代国語	3	2	2	7	15	245	
	古典 甲							175
	古典 乙	2						105
社 会	倫理・社会		2		2	15	70	
	政治・経済			2	2		70	
	日本史			3	3		105	
	世界史 A							
	世界史 B		2	2	4		140	
	地理 A							
	地理 B	4			4		140	
数 学	数 学	5			5	15	175	
	数 学 A							
	数 学 B		5		5		175	
	数 学			5	5		175	
理 科	物 理 A					15		
	物 理 B		3	2	5		175	
	化 学 A							
	化 学 B		2	2	4		140	
	生 物	4			4		140	
	地 学	2			2		170	
保健体育	体 育	男 4 女 2	3	2	男 9 女 7	男 11 女 9	315 245	
	保 健	1	1	1	2		70	
芸 術	音 楽	} 2	} 2		4	4	140	
	美 術							
	書 道							
外国語	英 語	5	5	5		15	525	
家庭		女 2	女 2			4	140	
小 計		31	男 30 女 32	29		男 90 女 92	男 3150 女 3220	
特別教育活動 (HR)		1	1	1		3	105	
増 加 単 位		2	男 3 女 1	4		男 9 女 7	男 315 女 245	
合 計		34	34	34		102	3570	

3科目の中2科目又は1科目4単位選択す。

主として就職、進学の科目

に恵まれた。初年度の七月二十九日から三十一日までの三日間、全校生徒参加による校外キャンプが実施され、八月七日には佐久米海岸にて一日だけであるが水泳訓練も行われた。二学期に入り、毎朝屋上で国歌吹奏と国旗校旗掲揚を伴う朝会礼が実施され、また、九月九日より週二回男子は空手と剣道の、女子は家庭の特別訓練が実施されるようになった。九月十四日には校内英語弁論大会が、十月二十七日には第一回体育祭が開催され、三学期に入ると文化祭やマラソン大会等の行事も行われた。翌三十九年度の水泳実習は、浜名湾遊泳協会の応援を得て内山海岸にて浜名湾古式泳法の訓練を中心に実施された。またこの年は、東京オリンピック開催の年にあたり、夏期休業を短縮して十月十一日から二十一日まで種目別に交代でオリンピックが観戦された。同年より、全校生徒参加による強歩大会が約二〇kmの距離で開催され、個人とクラスに対し賞状が授与された。またこの年十一月の文化祭には、鷹司平通氏作曲、一戸校長作詩による校歌（前年七月に制定）の発表会も行われた。学校生活面では、初年度より許可されたバイク通学が、市内高等学校の申し合わせにより禁止されたが、調髪の方は三年に進級すると同時に認められることになった。

昭和四十年年度より、強歩大会が新入生歓迎行事の一環として行われ、五月の連休を利用し実施された。三学期には、第一回卒業式が米本理事長、平山市長を迎え厳肅のうちに挙行され、理事長賞、皆勤賞、努力賞、功労賞等の賞が授与された。

さらに昭和四十一年度から、夏期訓練として陸上自衛隊富士学校での入隊訓練が実施された。初年度は、七月十八日から二十一日までは三年生が、七月二十一日から二十五日までは二年生が参加、隊員達と共に寝起きして規則正しい生活を送り、集団行動の基本が身につけられた。また、この入隊訓練は女生徒も一緒に行われたので大変話

題を呼んだが、昭和四十五年を最後に中止される。その後も若干の中断はあったものの夏季訓練は、御殿場国立青年の家、三ヶ日青年の家、春野町高校生山の村と場所を変えて行われている。それと同時に、月に一回全校訓練が実施され、例えば昭和四十二年六月の全校訓練は、NHKの体操の先生で知られる紅林武男氏を招いて体操指導が行われた。

このように、開校当初より「躰教育」の一環として各種の学校行事や訓練が実施され、集団活動を通して規律ある態度の育成に大変力が注がれたのである。昭和四十一年五月にはより一層の躰教育の徹底を図る為に『躰とたしなみ』という小冊子が全校生徒に配付されている。かくて躰教育を柱とする本校の教育方針が地域社会の人びとに知れわたるようになり、「躰の厳しい学校」、「規律の正しい学校」という評価を受けるようになった。

施設は年とともに充実し、昭和三十八年三月第一期工事が竣工したのに続き同年十二月には第二期工事が、昭和四十年四月には第三期工事が完工し、一号館（四、六九六㎡）のすべてが完成した。体育館も昭和三十九年十一月には竣工し、その年の文化祭の初日に体育館開きが行われた。その折り、米本理事長のテープカット、神事、祝辞に続いて、オリンピックの日体大体操チームにより素晴らしい演技が披露された。プールは昭和四十二年八月に完成し、プール開きには日本水連理事で往年の名選手太田光雄氏の模範水泳、浜名湾遊泳協会の方々による古式泳法の披露が行われ、またその折の生徒代表を従えての一戸校長のきれいな平泳ぎも印象的であった。同年十一月には、体育館横にプレハブではあったが剣道場が建てられその道場開きが行われた。また、二期期にはグラウンド整備が行われ、三〇〇mのトラックも建設された。昭和四十四年八月には作法室が落成、翌年には一戸校長の長年の念願であった武道場が建てられ、十月八日に落成式が挙行された。しかし同校長はその三か月前に夏の高校野球予選で、

本校野球部の応援中、突然亡くなるという悲運に見舞われていたのである。

(三) 充実・発展期

浜松日体高校は、前項でも述べた如く、柏日体高校を一つの模範として出発した。校内服、躰教育、各種行事及び校外授業、男女別学等多くの事柄を同校より受け入れている。しかし、浜松日体高校は、開校五周年を迎える頃（昭和四十二・三年頃）から、学校生活全般にわたって改革が進められ、少しずつ独自の路を模索し始めた。昭和三十八年学則定員一学年二四〇人（男子一二〇人・女子一二〇人）の男女別学として出発したのであったが、昭和四十三年度より男女共学の学級編成となった。また、それまでは生徒たちは登校すると必ず校内服に着替えなければならなかったが、同年よりこの校内服も廃止され、昭和四十五年からは、男子夏服の上着も廃止されることになった。

さらに、昭和四十五年十一月西野淑氏が二代目校長に就任すると、これまでの学習指導に加え、進学指導の面にも大きな力が注がれることになり、それとの関連で教育課程の改訂も行われた。もともと同校は、入学試験で併願制をとり入れたという性格上、入学してくる生徒間に学力差があったことは事実である。このような学力差を考慮せずクラス編成を行うと、授業についていけない生徒とついていけない生徒が明確化し、生徒にとってもマイナス面が多く、授業の進行にも多くの支障をきたすことになる。そのため、一年から二年に進級する際、上位の者を集め選抜クラス（一クラス）を編成し、その他の生徒を文系クラスと理系クラスに分け、学力別、進路別クラスを編成する方法をとることになった。それに相応して教育課程の改訂も行われ、従来は必修科目が殆どであったのに対し、

多くの選択科目が設定され、それぞれのクラスにあわせた選択教科制が導入された。このようにして、受験体制も徐々に確立されていき、昭和四十八年頃から大学進学率の上昇が顕著にみられるようになった。この頃になると、同校に対する地域社会の評価も以前とはかなり変わってきており、例えば、前浜松市長の平山氏は、第二十期生の入学式に際し次のように述べている。

これは初めてのころ、よくこの学校は、北高の落ちたのが来る所で、そういうのを拾う所だと言っておりまして。しかし、一昨々年、一昨年あたりから東大へも行っているのですよ。今年は、ここの医大へも入っております。国立の相当の所に入っている人たちは、かなりあります。これを見ても「北高を落ちたのを拾う学校」から、「大手を振って行ける学校」になっております。

昭和四十一年から五十二年までの進学状況（日本体育大学以外）

昭和41	大 学		4 年 制 大 学
	入学年度		
52	男 子		
4	女 子		
56	計		
2	男 子		短 期 大 学
11	女 子		
13	計		

49	48	47	46	45	44	43	42
<u>100</u>	<u>96</u>	66	65	82	84	72	87
3	9	16	16	10	5	2	6
<u>103</u>	<u>105</u>	82	81	92	89	74	93
8	10	8	6	26	1	10	4
22	28	18	19	17	13	19	24
30	38	26	25	43	14	29	28

52	51	50
<u>156</u>	<u>117</u>	<u>130</u>
7	7	10
<u>163</u>	<u>124</u>	<u>140</u>
3	4	6
18	32	25
21	36	31

この表からもわかるように、昭和四十八年以降特に男子生徒の四年生大学への進学者が急増しており、受験体制の確立のためのこれまでの地道な努力が実りつゝ、ある事をしめしていると言えよう。

さらには昭和五十一年度より、その年の入学試験の成績を検討していく中でその上位にある特定のグループがあることが判明したため、思い切って一年次より選抜クラスを編成し、国公立大学への受験にも対応できる態勢を整えることになった。その甲斐あって国公立大学への進学者も徐々に増え、昭和五十三年には東京大学へ合格する者も出てきた。昭和五十四年、西野淑二代校長が退職、後任に野口太彌校長が就任して進学体制は一層進み、昭和五十六年度より正式に「理数コース」が一年次より設置されることになり、教育課程も次頁の表のように改訂された。この理数コースとは、理数系の教科に重点を置き学習するコースという意味ではなく、五教科にまんべんなく重点を置いた国公立大学受験向きの特進コースという意味である。学年毎の履修単位数も、普通コースに比べると三単位増え三十七単位となり、週三日は七時間目まで授業がある。昭和五十八年には、単願・併願ともに理数コースを

教育課程（昭和56年度～）

科目	標準 単位	学 年		1 年			2 年			3 年			就 職				
		コース	7	普通	理数	文系	理系	理数	文系	理系	理数						
												コース		7	普通	理数	文系
国語	現代国語	7	3	3	3	2	2	5	2	3	4						
	古典乙	5	3	4	3	2	2				2						
	古典	3						4 (2)		(4) 2							
社 会	倫社	2			2	2	(2)	4	1	2	(2)	1	3				
	政治経済	2					(2)										
	日本史	3			3	(3)	(3)							(6)	(3)	(3)	(3)
	世界史	3			3	(3)	(3)							(6)	(3)	(3)	(3)
数 学	数学	6	6	7	2			(2)			(3)	1	3				
	数学	5				6	7			7	(4)(3)						
	数学演習	5							2								
理 科	物理	3			(3)	3	4			(5)	(4)	(3)	1				
	物理	3			(3)	3	4			(5)	(4)	(3)					
	化学	3								(5)	(4)	(3)					
	生物	3	3	4						(5)	(4)	(3)					
	生物	3									(4)	(3)					
体 育	体育男女	11	4	4	4	4	3	3	3	4	3						
	体育	7	2	2	2	2	1	3	3		3						
	保健	2	1	1	1	1	1										
芸 術	音楽	2	(2)	(2)		(1)		(2)			(2)	1					
	音楽	2															
	美術	2	(2)	1	(2)	1	(1)	1	(2)	1	(2)						
	美術	2	(2)	(2)							(2)						
	書道	2			(2)	(1)		(2)	1		(2)						
外 国 語	英語 B	15	7	7	6	5	7	6	6	6	3						
	演習総合							(2)									
家 庭	家庭一般	4	2	2	2	2	2				3	女					
食被服																	
商 業	簿記	2-6									3	男					
	計算実務	2-8									3						
	商業一般	2-6									3						
特 別 活 動	ホームルーム	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1						
	クラブ活動	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1						
備 考		() は選択															

希望する者が増え、一クラス四十八名定員のところ、一、〇五四名の志願者があり、その倍率は何と二十二倍にも達した。その中のかんりの者が公立高校へ入学したものの、この理数コースの学習に耐えうると判断して入学したものが定員の二倍近くいたため、同年はこの理数コースを二クラス設けることになった。また、理数コースへの希望者が多数に昇った場合には、準理数コースを設けることにした。願書提出の段階で、理数コースと普通コースは区別されていたが、一年次から二年次に進級する際に、普通コースの上位と、理数コースの下位の若干名を入替え、普通コースへ入学した者もその後の努力次第では理数コースへも進めるよう配慮されていた。この普通コースにしても、二年次より文系コースと理系コースに分化し、四年生私立大学や短期大学の受験に向けて充実したカリキュラムが編成されていた。このような受験体制の充実にもなつて、国立・私立四年生大学への合格者数が次の表のごとく年とともに増え、平成三年度には、国立四年生大学には六十五名、私立四年生大学には三五〇名もの合格者を出している。

昭和五十五年から平成元年までの進学状況

55年	年次	11	国立公立大学	165	私立大学	35	短期大学	34	専門・各種	296	卒業生数
-----	----	----	--------	-----	------	----	------	----	-------	-----	------

63年	62年	61年	60年	59年	58年	57年	56年
37	20	24	9	19	16	14	8
287	263	201	154	231	146	182	115
55	53	48	18	48	33	41	29
60	41	46	32	46	33	31	30
372	327	320	208	339	230	276	227

平 元 年	平 2 年
46	38
238	197
61	58
55	64
313	320

(注：表の数値は合格者数を示す。その中には浪人も含む。)

次に、昭和六十二年より浜松日体高校においても、推薦入学制度を導入することになった。これは、近年同地区の私立高校が内定制をとるようになったり、県立高校においても一般受験とは別に推薦入学方式を採り入れる学が増えてきたという周囲の状況を考慮にいられての判断であったと言えよう。同校の推薦制度には、理数推薦と一般推薦の二種があり、理数推薦とは、従来このコースで行っていた、内申計と国社数理英の五教科のそれぞれの評定が規定以上の者を対象に予め中学校長から推薦してもらい内定していた内定制を制度化したものである。同校の理数推薦では、推薦制度の本来の意味を鑑み、且つ県立高校の制度に準じ学力検査を免除することになっている。一般推薦とは、今回新しく普通コースに設けた制度で、内申計が規定以上を条件とし(但し評定一以下が無いこと)併せて全人的な特色ある尺度をいくつか設け、その一つをクリアすれば早い時期に合格を内定する制度である。しかし、この場合、学力特色をよく理解し、また同校の校風造りに際し中心的役割を担えるような人物をより多く獲得したいとの意図があったといえよう。

また、昭和五十八年度の生徒募集から特待生制度が発足した。この制度は、普通コース・理数コースに限らず特別成績の優秀な単願生を対象に、毎年若干名、授業料（成績により進級時に更新）入学金・施設拡充費を免除するものである。

このような各種制度の導入及び理数コースの開設にともなう受験体制の確立によって、昨今の浜松日体高等学校の充実ぶりには目を見張るものがあるといえよう。

現在、浜松日体高校には計十七の部が活動を行っている。運動部としては、陸上競技・水泳・剣道・柔道・野球・バレー・バスケット・テニス・卓球・サッカーの計十の部が、また、文化部としては、吹奏楽・華道・茶道・書道・美術・写真・家庭・生物・英語研究の計九の部が毎日練習に励んでいる。これらの中で、特にこれまで目ざましい活躍を見せたのが、水泳と陸上の両部である。水泳部については、すでに昭和四十一年には飛板飛込と高飛込において国体へ選手を出場させている。その後も、同部は毎年のように国体や高校総体に選手を派遣し、飛込や競泳で上位の成績を収めている。近年では、昭和六十三年の第四十三回国民体育大会以来三年連続同校の服部選手が二〇メートル平泳ぎで二位に、また、同選手は、平成二年の日本室内選手権二〇〇メートル平泳ぎで四位に入賞している。陸上部については、第二十五回高校総体（昭和四十七年）四〇〇メートルで石津選手が二位に入賞したのをきっかけに、その後も多くの選手を全国大会に出場させ、好成績を収めている。特に昭和五十三年の高校総体一六〇〇メートル・リレーでは、同校リレーチームは全国高校新記録を樹立し、陸上競技史上に輝かしい金字塔をうちたてたのである。また、近年になって、女子長距離部門の活躍が目立ち、昭和六十三年には全国女子ジュニアクロスカントリイで同校チームが五位に入賞、平成元年、二年には女子長距離チームが県高校駅伝で優勝し、全国高校

女子駅伝に出場した。次に文化部では、平成元年に書道部の北村多栄子が年賀葉書コンクールで郵政大臣賞を、また毎日全国学生書写書道で文部大臣賞を受賞している。

施設面の整備拡充についてであるが、昭和四十九年には図書室・生物室・視聴覚教室・生徒会室等のある二号館新館が完成し、同年五月にその落成式が行われた。創立二十周年にあたる昭和四十七年五月には、三号館（普通教室・大教室・進路指導室・特別室）建設のための地鎮祭が行われ、同年十一月五日に創立二十周年記念式典の一つとして三号館の落成式が挙行された。また、運動部活動の活発化とも平行し、昭和四十五年頃から運動部部室の増設工事が行われ、同年六月と昭和四十八年には部室が五室増築され、昭和五十八年には十二室もの運動部部室が増築された。その他の運動部関係の施設については、昭和五十年九月に野球場防球ネットが設置され、昭和五十三年八月にはグラウンドの改修工事及び体育館床面の改修工事が完工、昭和六十二年二月にはプール管理棟が増築され、さらに平成元年八月には体育館が全面改装され、平成二年には野球部室を新設した。

次に、昭和五十四年度から同校では、地域社会との繋がりを深めるために、県下一斉クリーン作戦の一環として奉仕活動の日を設け、年二回全校生徒をあげて学校周辺道路の草刈りやゴミ拾いを実施している。献血も社会奉仕の意味で、最初は三年生の卒業献血と銘打って行っていたが、昭和五十三年からは全校生徒に呼び掛け、昭和六十年には献血者が四八〇名にも達し、県知事より感謝状が、平成三年には厚生大臣より感謝状が授与されるに至った。最後に、浜松日体高等学校の一つの特色として、校外授業や各種訓練と並んで、文化的行事が学校行事の中によく採り入れられていたことがあげられる。開校当初より殆ど毎年のように、外部より講演者を招き講演会が実施されている。そこには、勉強やスポーツの他に、文化的な面でも幅広い教養を身につけさせようとする学校側の姿勢

を見ることが出来よう。

以上、浜松日体高等学校は、開校当初、柏日体高等学校を一つの模範として、校外授業や各種の訓練授業を通して徹底した躰教育がなされ、大変ユニークな校風が築かれていった。このような開校当初の精神を継承しつつ、昭和四十五年頃から受験体制の確立にともない浜松日体高校は、文武両面を兼ね備えた「進学校」へと脱皮していったのである。今後とも同校の一層の発展が期待される場所である。